

# 旅の絵

堀辰雄

青空文庫



……なんだかごたごたした苦しい夢を見たあとで、やっと目がさめた。目をさましながら、私は自分の寝ている見知らない部屋の中を見まわした。見たこともないような大きな鏡ばかりの衣裳戸棚、剥げちよろの鏡台、じゆくじゆく音を立てているステイム、小さなナイト・テエブルの上に皺くちやになつて載っている私のふだん吸つたことのないカメラヤの袋（私はそれを何処の停車場で買ったのだか思い出せない）、それから枕もとに投げ出されている私の所有物でないハイネの薄っぺらな詩集、——そう云うすべてのものが、ゆうべから私の身のまわりで、私にはすこしも構わずに、彼等の習慣どおりに生き続けているように見えた。

今しがた見たことは確かに見たのだが、どうしても思い出せない  
変にごたごたした夢も、それまで自分はぐっすり眠っていたのだ  
という感じを私に与えはしているものの、同時に、まるで他人の  
眠りを借りていたかのような気にも私をさせないことはなかった。

……

私はベッドから起き上ると、窓を開けあに行つた。しかしその窓  
のそとはすぐ高い石囲いで、石囲いの向うには曇つた空と、隣り  
の庭のすつかり葉の落ちきつた裸の枝先きが見えるきりだった。  
が、その窓を通して、しつきりなしに汽船のサイレンがはいつて  
きた。その聞きなれない異様な叫びは、自分がいま東京から離れ  
ている、目に見えない長距離を、一瞬間、私の目に浮び上らせそ

うにした。そういう喧騒けんそうの中からひよつくり生れてきかかった一種の旅愁に似たもの、——私は再び窓を閉じた。……

そうすると今度は、私の背中合わせの部屋から、タイプライターの何かにじやれているような音が聞えてきた。が、それはだんだんいらいらしたような音に変わりながら、すぐ止やんでしまった。

私はゆうべこのホテルに着くなりすぐ目に入れたところの、廊下の隅すみにほうり出されていた、錆さびびかかったようなタイプライターを思い出した。——それにしても、一体いまは何時ぐらいなのか少しも分らない。まだ朝飯は食わしてくれるのかしらと思ひながら、私はボオイを呼ぶために、窓とは反対の側の、ドアを開あけてみた。食堂は私の部屋と隣り合わせになっているらしい。そこか

らは途切れ途切れな話し声にまじ雑つてときどき皿にぶつかるスプーンやナイフの音が聞えてくる。……しかしそれは誰かがまだ朝飯を食べているのか、それとももう昼飯を食べ出しているのか、わからない。……どうも具合がへんだから、私はドアを開け放しにしておいて、もう食堂からボオイが出て来そうなものだど待ち伏せていた。

やっと食堂からボオイが姿を現わした。支那人しなじんらしかった。私は彼が日本語を解するのかどうかを知らなかつたので、英語と日本語をまぜこぜにしなから、

「Breakfast——まだ出来る？」と聞いた。

「どうぞ——」と言ってボオイは空あきぎら皿をもった手で食堂の入口

を示したが、そのまま無愛想にコック場の方へ行ってしまった。

私はなんだか一人きりでそんな食堂の中へはいつて行くのが氣づまりだったので、ボオイが再び皿を運んで来ながら私の部屋の前を通るのを待っていた。丁度その廊下の映っている鏡に向つてネクタイを何度も結び直しながら、あたかもそれがために何時までも愚図愚図しているかのように装つて。

やつとのこととで再び姿を現わしたボオイの跡にくつついて食堂の中へはいつてみると、食堂と云うのもほんの名ばかりであつて、二つの部屋をぶち抜いて、そこに安つぽい花模様のあるクロオスを掛けた卓子<sup>テエブル</sup>が五つか六つ置いてあるきりだった。中央の大きな卓子にはホテルの主人夫婦が珈琲<sup>コオファイ</sup>を飲んでいた。そうして

向うの壁ぎわの隅の小さな卓子には、青色のブラウスを着て、ブ  
ロンドの髪をした十八九の娘がひとり、それから中庭に面して  
一段低くなったヴェランダのようなところに卓子が二つ置いてあ  
つたけれど、その一つには、黒っぽい着物を着たふたりの女――  
栗色くりいろの髪をして綺麗きれいに化粧した二十七八の若い女と老眼鏡をか  
けたその母親らしいのが差し向いで食事をしていた。そのもう  
一方の空あいた卓子が私にあってがわれたのである。食堂の時計を見  
ると十一時近くであった。もうこんな時刻なのに、この食堂がこ  
んな女達ばかりなのには私はちよつと異様な気がした。私が這入はい  
つてゆくのを認めると、珈琲を飲みかけていた主人が私の方へ顔  
を向けて微笑ほほえみかけながら「ゆうべはよく眠れたか？」と英語で

訊きいた。それだけならいいが、それと同時に、他の女達が一ぺんに私の方をけげんそうにふり向いたので、私は少しどぎまぎしながら、反射的に微笑を浮べたまま、主人にうなずいて見せた。やがてこんな stranger によつてちよつと中絶された会話をみんなは再び続け出したらしかつた。ときどきヤポンスキイという言葉が混じる。ひよつとすると俺おれのことでも話しているのかしらんと思いなながら、そんな空想によつてかすかな氣づまりを感じながら、私は食堂の窓から、半ば寝ぼけた顔つきで中庭を眺めていた。が、それは中庭といつても、狭苦しくつて、樹木なんぞは一本も植うつていず、ただ空箱の上に一鉢ひとはちの菊が置かれてあるつきりだった。しかもそれすら汚きたらしく枯れたまんまだつた。……

小さなトランクひとつ持たない風変りな旅行者の一種独特な旅愁。——私はさっぱり様子のわからない神戸駅に下りると、東京では見かけたことのない真つ白なタクシイを呼び止め、気軽に運賃をかけ合い、そこからそうしつづけている者のように、元町通りの方へそれを走らせた。もつとも通行人を罵る運転手の聞きなれないアクセントは私をちよつとばかり気づまりにさせたが。……

元町通り。店店が私には見知らない花のように開いていた。長い旅のあとなので、すっかり疲れきり、すこし熱気さえ帯びていたけれど、それでも私は見せかけだけは元氣よくコツコツとステッキを突きながら、人々の跡から一体どんな方角へ行くのかわか

りもせずに歩き続けていた。今夜何処へ泊ったものやらまだ目あてのない旅行者で自分があることに誰からも気づかれまいと思つて……。私はとある珈琲店の中へ気軽そうにはいつて行つた。ただその店の名前が東京で私の行きつけている珈琲店の名前に似ていたばかりに。私はそこから須磨すまのT君のところへ電話をかけた。T君はすぐ私のいる店へ来ると言つた。そうして私がまだ一杯のオレンジードを飲んでしまわないうちに、そのT君が元氣よくはいつて来た。彼はベレ帽をかぶり、なんだか象の皮のようながいとう外套を着込んでいた。

それから私たちは薄ぐらい山手通りを、狭い坂を上つたり下りたりしながら、小さなホテルから小さなホテルへと歩き廻つてい

た。しかし私の気に入ったホテルはひとつも無かった。私たちは再び中山手通りへ出た。しかしそのだだ広いだけ、かえって薄ぐらい感じのする電車通りには、ほとんど人影がなかった。T君が突然立ち止まった。そうして電車通りの向う側にある一つの赤ちやけた小ぢんまりした建物を指さした。その家の上の、すす煤けたなりに白白とした看板には、

### HOTEL ESSOYAN

という横文字が、建物と同じような赤ちやけた色で描かれてあるのが、ぼんやりと読めた。遠くからそれを一目見たきりで、その小さなホテルは私の気に入った。——と見ると、その電車通りに面した二階の窓の一つが開かれていて、それが細長い光りを暗

い鋪道ほどうの上にくつきりと落していた。そしてその窓からは、逆光線を浴びているので、年よりなのか若い女なのか見当のつかない、そして髪の毛だけがきらきらと金色に光っている、一つの女の顔が、そのホテルの方へと電車の線路を横切りつつある私たちの方を窺うかがうようにしていたが——それはちよつと無気味な感じだった——私たちがその窓の下までくると、向うでも私たちを恐れるかのように、その窓は閉ざされてしまった。

私たちは小さな石段を昇り、そのこのベルを押しした。しかし、いつまでも、誰も出て来そうな気配がしない。そこでT君が再びベルを押ししたり、ノツブを廻してみたりしている間、私は石段を下りて、もう一度それがホテルであるかどうかを確かめるため、さ

つきの看板をふり仰いで見た。そうしてその赤ちやけた横文字をホテル・エソワイアンと読みにくそうに口の中で発音しながら、今度はその大きな横文字の下方に、ずっと小さな字で「HEL」と描かれてあるのまで認めた。しかしその電話番号のあるべき場所は空虚のまんまだった。そしてそこだけが気のせいか他処より一そう白白と見えるのは、そこに最近まで書かれてあつた電話番号がいまは白いペンキで塗りつぶされてあるのかも知れなかった。

やつとのこととで表扉が大きく軋きしみながら開かれた。そしてその内側には、そのホテルの主人らしい、すこし頭の禿はげかかった、私たちよりも背の低いくらいな毛唐けとうが、ノツブを握つたまま突っ立っていた。T君が英語でもって部屋はあるかと声をかけた。す

るとその主人はそれよりもつと下手糞へたくそな英語でそれに応じた。

（私はへんに重々しげなアクセントによつて彼が露西亞ロシア人らしいのを認めた。）——いま自分のところには階下に小さな部屋が一つ空いているきりだ。それも丁度いまその部屋の借り手が東京へクリスマスをしに行つていたので、その間だけなら貸すことが出来る、というような意味のことをT君に言つてゐるらしかつた。

そんな部屋の交渉は一切T君に任せたり、その玄関口に無雑作にほうり出されてある埃ほこりまみれの本棚ほんだなだの、錆さびびかかつたタイルタイルだのへ目を注いでいた私は、やつと顔を持ち上げながら、どうせ私も二三日ぐらいしか泊らないつもりだからそれを見もらせて貰もらおうじゃないかとT君を促した。T君がそれを主人に通

訳してくれた。さつきからT君の方をばかり見ていたその主人は、今度はそのおずおずしたような視線を私の方へ注いで、ではひとつその部屋を見てくれと言いながら、先きに立って、便所やらコック部屋やら浴室やらの前を通りぬけながら、ずっと奥まった部屋へ——そんな奇妙なところに二つばかり小さな部屋があるのだが、その一つのなかへ私たちを導き入れた。

そんな奥まった小さな部屋へはいると、いきなりT君が仏蘭西フランスの何処とかの田舎いなかで泊ったことのある古い旅籠はたごの部屋にそれがそっくりだと言い出したので、私もそうかなあといいながら、そこにある古ぼけた寝台だの、いやに大きな鏡ばりの衣裳戸棚だの、剥げちよろな鏡台だの、小さなナイト・テーブルだのを眺め廻しなが

ているうち、それがいかにもそんな外国の片田舎にありそうな旅籠屋のような気がしだした。そしてこの悲しげな部屋がいまの私の心に不思議なくらい似つかわしいように思えた。

その小さな部屋が朝飯つきで一泊三円だという。そこで私はともかくも十円札を一枚だけ渡しておいた。そうすると、その時までもすると、小さなトランクひとつ持っていない私たちを妙に不安そうな眼つきで見がちだった、すこし頭の禿げたその主人は急にそわそわし出したように見えるくらい愛想よくなつて、私の方を向きながら、それではお前もこちらにクリスマスを送りに来たのかなどと問い出した。私はまた私で、やがてその主人のかかえてきた大きな宿帳に、露西亞人や波<sup>ポランド</sup>蘭人らしい名前ばかり

の並んでいる下へ自分の名前をぶきつちよな羅馬字<sup>ローマ</sup>で書きつけているうちに、クリスマスなんかを一向楽しいとも思ったことのない私であったが、なんだか不意に、明日からのクリスマスを楽しく送りに、わざわざこんな神戸くんだりまでやって来たかのような気にさえなり出したほどであった。……

T君が明日また正午頃来るからと約束して帰ってしまったと、私は今朝<sup>けさ</sup>から汽車に乗りどおしだったので、さすがに疲れていたし、どうやら熱もすこしあるらしいので、すぐ服をぬいで、シャツだけになって、寝台に横になった。それでもその部屋は小さいだけ、ステイムで蒸し暑いくらいだった。が、さて横になってみると、私はこんな慣れない部屋の中ではなかなか寝つかれそうもなかつ

た。あいにく読む本は一冊も持っていない。その時私は、つい今しがたこの部屋を片づけに来たホテルの主婦らしい女が、鏡台の抽出ひきだしから腕いっぱい書類を取り出して、それを他の部屋へ移そうとするのを見て、それはそのままにして置いてもいいと言ったら、それを又元のところへ入れ直して行ったのをひよっくり思い出した。私はベッドから起きて行った。そうしてその抽出しに手をかけようとした時、ちよつと気がとがめたが、どうせこんなところへ入れっ放しにして置くほどのものなら大事なものではありませんまいと思ひ直して、それを構わずに開けてみた。抽出しの中はなんだか私の読めない露西亞語の本ばかり詰まっていたが、なかに一冊独乙語ドイツの薄っぺらな本の雑つているのを見つけた。それか

ら小さな独露辞書らしいものもあつた。その薄っぺらな本を手にとつて見ると、モスコオで発行されたハイネの小さな詩集であつた。これやあいまいものがあつたと、私はそれを手にしたまま、再びベッドにもぐり込んだ。ぱらぱらと頁ページをめくつてみると、或る頁に名刺ぐらいの大きさの写真が一枚挿はさんであつた。雀斑そばかすのありそうな、若い男の写真である。この露西亞人らしい男が、この部屋の借り手で、そしてこのハイネの詩集を読んでいるのかと思つたら、ちよつと懐なつかしい気がした。私はそれを注意深くもとの頁に挿んで、それからこんどはその巻頭にある「五月に」(Im Maie)という詩を、一字一字丁寧に見つめながら読んでいった。

[Die Freunde, die ich geku:st und geliebt,]

[Die haben das Schlimmste an mir veru:bt.]

Mein Herz bricht ……

——しかし独乙語はなにしろ高等学校でちよつと習つたきりなので、その詩のなかの太陽だとか薔薇だとか心臓だとか五月の空だとか、そんな簡単な名詞ぐらゐは覚えていたけれど、かんじん肝腎な形容詞や動詞をすっかり朧忘れてしまつていたので、私は自分の空想力でやつとそれを補いながら読んでみたのであるが、どうもそんな私に分かる語彙ごいだけから見ると、その詩はおよそ私の現在の気持からはあまりに懸かけ離れていそうに思えたので私はその詩

の意味をちつとも嘸<sup>の</sup>み込めないうちに、その小さな本を私の枕<sup>まくら</sup>も  
とに伏せてしまった。それに私はいいい具合にすこしうとうとしだ  
したものだから……

正午ごろ、T君が私を誘いに来てくれた。それから二人でホテ  
ルを出ると、一時間ばかり古本屋だの古道具店だのをひやかした  
のち、海岸通りのヴェルネ・クラブに行った。しやれた仏蘭西料  
理店だ。その客は大概外国人ばかりだった。私たちが一隅の卓  
で殻<sup>かき</sup>つきの牡蠣<sup>うさぎ</sup>を食っていると、兎<sup>うさぎ</sup>の耳<sup>みみ</sup>のようにケープ<sup>えり</sup>の襟<sup>えり</sup>を立  
てた、美しい、小柄な、仏蘭西女らしいのが店先きにつと現われ  
て、ボオイをつかまえ、大事そうに両手でかかえている風呂敷包

を示しながら、何やら片言まじりの日本語で喋舌しゃべっている。私には「ネーブルをもつてきました」と言ったようにそれが聞えた。ボオイはなんだか解わからないような顔をして奥へ引つ込んでいったが、それと入れちがいにその料理店の主人らしいのが出て来て、仏蘭西語で愛想よく一人一人に挨拶あいさつをしながら客たちの間を通り抜けて、その婦人の方へ近よって行った。その時その婦人が風呂敷包を開けながら、ヴェルネ氏に渡したものをちらつと見ると、それは一匹の可愛らしい三毛猫であった。ネコといったのを私はネーブルと聞きまちがえたのであった。ヴェルネ氏はそれをここにこして受取りながら、しきりに [Tre's bien ! Tre's bien !] と繰り返している。おしまいには婦人までが鸚鵡おうむがえし

に「[Tre's bien?]」と二度ばかり口ごもる。低くはあるが、いかにも満足したような声である。

私たちはそれからマカロニや何やらを食べて、その店を出た。そうして私たちはすぐ近くの波止場はとばの方へ足を向けた。あいにく曇っていていかにも寒い。海の色はなんだかどす黝ぐろくさえあった。おまけに私がそいつの出帆に立会いたいと思つていた歐洲航路の郵船は、もうこんな年の暮はなはになつては一艘いっそうも出帆しないことがわかつた。私の失望は甚はなはだしかつた。そうしてただ小さな蒸汽船だけが石油くさい波を立てながら右往左往しているきりだつた。ときどき私たちとすれちがつて行く仏蘭西の水兵たちの帽子の上に、ポンポン・ルウジユが、まるで嬉うれしがっている心臓の

ように、ぴよんぴよん跳ねていたが、それが私の沈んだ心臓と良コントラストい対照をした。海岸通りの何とかいう薬屋のシヨオウインドのぞを覗いたら、パイプやなんかと一緒に五六冊、英吉利語の本が陳列されてあつた。そのなかにふと海豚いるかそうしよ叢書の「プルウスト」を見つけたので、ゆうべの読みづらかつたハイネの詩集を思い出しながら、その薬屋のなかへ這入つてその小さな本を買つた。T君の話では、この店にはときどき随筆物で面白い本が来るのだそうだ。それからまた、私たちはその窓から電話やタイプライタアの強請ゆすつたり吃どもつたりする音の聞えてくる商館の間を何となくぶらしてみたり、今では魚屋や八百屋やおやばかりになった狭苦しい南ナ京町ンキンまちを肩をすり合わせるようにして通り抜けたりしたのち、今度

はひっそりした殆どほとん人気のない東亜通りを、東亜ホテルの方へ爪つ先まきあがりさりに上った。その静かな通りには骨董店こつとうてんだの婦人洋服店だのが軒なみに並んでいる。ヒル・ファルマシイだとか、エレガントだとか云う店は毎年軽井沢に出張しているので私には懐しく、ちよつとその前を素通りしかねた。とあるネクタイ屋のシヨオウインドに洒落しやれたネクタイが飾つてあるので近づいて行って、覗こうとしたら、何処からか犬が私たちに吠ほえついた。あたりを見廻しても、犬なんかいないのだ。やっと気がついて頭を持ち上げて見ると、そのネクタイ屋の二階には看板の代りに、このへんの大抵の洋館のようにバルコンがついていて、その緑色の亜字欄せいかんに精悍せいそうかんなシエパードが一匹縛りつけられていたが、そい

つが私たちに吠えているのであつた。ネクタイ屋の看板にしては、これはすこし物騒ぶつそうすぎる。聖公教会の門のところこに、まるで葡萄ぶの房ふさみたいどううにひとかたま一ま塊かたりに、乞食こじきどもがかたまつている。私たちがそれを不思議そうに見過みごしながら、それからすこし急な坂を上つてゆくと、今度は一軒の立派な花屋の前に、何台も何台も、綺麗な自動車ばかりがかたまつている。その時やつと教会と乞食と花とが私の頭のなかで唐から草くさ模も様やうのように絡からみ合あつて、私に、今夜がクリスマス・イヴであるのを思い出させた。……私はそこでT君の方へふりかえりながら言つた。

「これから外人墓地へでも行つてみようか？」

「うん——君さえ元気があれば行つてもいいよ……」

「そうだなあ……」

……自分で言い出して、私はちよつと首をかしげる。そんな会話を交かわしながら、いつの間にか私たちの歩いている山手のこのへんの異人屋敷はどれもこれも古色を帯びていて、なかなか情緒がある。大概の家の壁が草色に塗られ、それがほとんど一樣に褪さめかかっている。そうしてどれもこれもお揃そろいの鎧よろい扉どが、或いはなかば開かれ、或いは閉ざれている。多くの庭園には、大粒な黄いろい果実を簇むらがらせた柑橘かんきつ類るいや紅い花をつけた山茶花さざんかなどが植わっていたが、それらが曇った空と、草いろの鎧扉と、不思議によく調和していて、言いようもなく美しいのだ。……T君もひさしぶりにこの辺まで上つて来たものらしく、さつきから

しきりに此<sup>ここ</sup>処<sup>こ</sup>いらまでよく遊びに来たことのある昔のことを思い出してはひとりで懐<sup>なつか</sup>しがっている。私は私で、こんなユトリ口好みの風景のうちに新鮮な喜びを見出<sup>みいだ</sup>している。こんな家に自分もこのまま半年ばかり落着いて暮らしてみたいもんだなあと空想したり、こういうところでその幼時を過したT君のことを羨<sup>うらや</sup>ましがったりしながら、だんだん狭くなってくる坂を上ったり下りたりしているうちに、今度はT君の方が首をかしげだした。どうやら彼自身のこんがらがった幼時の思い出をほごすのにあんまり夢中になり過ぎていたT君は、いつの間にやら、私たちの目指<sup>めざ</sup>している外人墓地への方角を間違えてしまっているらしかった。その拳<sup>あ</sup>句<sup>げ</sup>に漸<sup>げく</sup>つと彼は、私たちが飛んでもない見当ちがいな、或る丘の

頂きに上つて来てしまったことを、氣まり悪そうに私に白状した。

そうして私たちの上つて来たやや険しい道は、一軒の古い大きな風変りな異人屋敷——その一端に六角形の望楼のようなものが唐とうとつ

突な感じでくつついている、そして棕櫚しゅろだのオリイブだのの珍

奇な植物がシンメトリックな構図で植わっている美しい庭園をもつた、一つの洋館の前で、行きづまりになっていた。そうして少

しがっかりして、息をはずませながら、その風変りな家に見とれている私たちの姿を目ざとく認めると、黄色に塗られた鉄てつ柵さくご

しに、その庭園の中から一匹のシエパードが又しても私たちに吠ほ

え出した。私はあんまり犬が好きじゃないのだ。どうもこの辺もいいけれど、もの静かに散歩をするには、すこしシエパードが多

過ぎるようだ。

夕方、私たちは下町のユウハイムという古びた独乙菓子屋ドイッの、奥まった大きなストーブに体を温めながら、ほっと一息ついてた。其処そこには私たちの他に、もう一組、片隅かたすみの長椅子に独乙人らしい一対の男女が並んで凭よりかかりながら、そうしてときどきお互の顔をしげしげと見合いながら、無言のまんま菓子を突っついていくきりだった。その店の奥がこんなにもひっそりとしていて、入りに引きかえ、店先は、入れ代り立ち代りせわしそうに這入はいってきては、どっさり菓子を買って、それから再びせわしそうに出てゆく、大部分は外人の客たちで、目まぐるしいくらいであつ

た。それも大抵五円とか十円とかいう金額らしいので、私は少しばかり呆氣あつけにとられてその光景を見ていた。それほど、私はともすると今夜がクリスマス・イヴであることを忘れがちだったのだ。

私はなんだかこのまんま、いつまでも、じつとストーブに温まっていたかった。しかし私は旅行者である。何もしないで、こうしてじつとしていくことも、後悔なしには、出来ないのである。

やがて若い独乙人夫婦は、めいめい大きな包をかかえながら、

この店を出て行った。JUCHEIMと金箔きんぱくで横文字の描いてあ

る硝子戸ガラスドを押しあけて、五六段ある石段を下りて行きながら、男

がさあと蝙蝠傘こうもりがさをひらくのが見えた。私は一瞬間、そこには雪

でも降りだしているのではないかしらと思った。ここにこうして

ぼんやりストーブに温まっていると、いかにもそんな感じがして来てならなかったが、静かに降りだしているのは霧のような雨らしかった。

その夜十二時近くに、私はすっかり雨に濡れ、力なげな咳さえしながら、午前中に出たきりのホテル・エソワイアンに帰って来てみると、その中はひっそりかんとして、誰もまだ帰ってきていないのか、それとももうみんな寝てしまったのか、分らないくらいだった。薄ぐらい廊下にただ一匹、からす猫がうろうろしていた。私はふとヴェルネ・クラブでちらっと見た美しい婦人の抱いていた仔猫のことを思い出し（どうしてだか、それがずっと数日

前のような気もしたが、そのきたならしい猫をそつと抱き上げて、咽喉のどのところを撫なでてやったら、すぐにそいつが咽喉をごろごろ鳴らし出したので、私はなんだか反かえつてさびしい気がした。床におろしてやると、私の足へ身をすりよせるようにして、ついてくるのだ。すこし邪魔つけになって、私はその猫を足で向うへ押しやりながら、自分の部屋にはいろうとしてそのノツブに手をかけた拍子に、ひよいと薄ぐらい廊下の突きあたりを見すかすと、其処に、二階への階段へちよつと片足をかけたまま、ぼんやりした人影がこちらへ顔を向けながら突つ立っているのに気がついた。それは女にはちがいないが、その顔は電燈の片光りを浴びて、へんに無気味な凸凹でこぼこをつくつていたので、それが少女の顔なのか

年よりの顔なのか私にはどうしても識別できなかつた。私はふと最初の晩、ホテルの窓から顔を出していた女のことを思い出した。その時と同じように、その髪の毛だけきらきらと金色に光つていたが、その髪かっこうの恰好は今朝私が食堂で見かけた青衣の少女のそれとそっくりだつた。……私はなんだかぞつとしたような気持ちになつて、急いで部屋にはいるなり、ドアをぴたんと閉めてしまつた。それをうるさい猫のせいにして。……それから私が着物をぬいでいる間中、その猫はそのドアを外から爪つめでがりがり掻かいていたが、私がベッドに横になつた時分は、もうあきらめたのか、その爪の音はしなくなつた。とても疲れていて、さつきまでは眠くつていまにも倒れそうであつたのに、さて電燈を消してしまふと、

よくあるやつだが、急に目が冴え冴えとしてきた。そこでしようことなし、再び電燈をつけ、今日買ってきたばかりの「プルウスト」を出鱈目に披きながら読み出した。そうしてひよつくり読みあてたのが、こんな一節であった。

——ノルマンディ海岸のバルベックに少年がはじめてお祖母さんと一しよに到着した晩のことである。彼等はグラランド・ホテルに泊る。彼は自分の部屋にはいる。長い旅のあとなので、すこし熱気を帯び、ぐったりと疲れて。しかし眠ることは、こんな見慣れぬ家具類のなかでは、とても出来そうもない。習慣が、時計の音を黙らせたり、堇色のカーテンの敵意を弱めたり、家具を動かしたりする余裕がないのだ。こんな気味の悪い部屋のなかに、

と云うよりも、まるで野獸の洞窟どうくつのような中に、たった一人きりで、四方八方から異形いぎようのものに取り囲まれているよりか、むしろ死んでしまいたいと少年は思う。お祖母さんがはいつて来て、彼をなぐさめ、彼が靴のボタンをはずすのを手つだい、着物をぬがせ、彼をベッドに入れてくれ、そしてそこを立ち去る前に、もし夜中に何か彼女にして貰もらいたいことがあつたら、彼の部屋と彼女の部屋との間の仕切りをノックするようにと言い残して行く。彼がノックをすると、お祖母さんはすぐ来てくれる。しかしその夜をはじめ、それから幾夜となく、彼は苦しむ。——彼は愛人のジルベルトなしに何時いつまでも生きなければならぬのではないかという考えや、彼の両親を永久に失うのではないかという考えや、

彼自身の死の考えに恐怖しだす。しかしそういうような愛人や両親や自分自身から離れている不安は、その不安に慣れるにしたがつて、彼自身もだんだん平気になつて行くのではないかと考えはじめた刹那、それは一層大きな恐怖に変わる。何故なら、習慣の錬金術れんきんじゆつがこうして苦しんでいるものを完全な無関心者ストレンジヤア（その者にはそんな苦しみの原因が全く莫迦ぼかげたものに思われるのだ）に変えてしまい、そうしてその時こそ彼の愛情の対象が消えるのみならず、その愛情そのものさえ消えてしまふかも知れないからだ……

——ふとそんな一節を読みあてた頁ページから私は目をそらして、私にはまだ慣れきつていない自分の部屋を眺めながまわしたのち、それ

から目をつぶつて、今朝のちよつと無気味だった眼覚めを心のうちにまざまざと蘇よみがえらせた。……

翌朝、私が目をさましたのは昨日よりもまたずっと遅いらしかつた。例の支那人しなじんのボオイを呼んで、朝飯はまだ食わせてくれるかと聞いたら、すこし怒つたような顔つきをして、朝食を食べるならもう少し早く起きてほしい、もう十二時だ、と下手糞へたくそな日本語で、それだけ一層そう見えるのかも知れないが、私にかなり突つ慥つげんな返事をした。が、私が食堂の中へはいつて見るとそこにはまだ昨日と同じように三人の女が遅い朝飯に向つていた。私の隣りのテエブルの母娘おやこづれらしい方は、ふたりとも昨日と同じの

黒い衣服をつけて、若い女の方は相変らず綺麗に化粧をしていたが、もう一方の、私がきのうは十八九の少女だとばかり思い込んでいた金髪の娘の方は、今朝は光線の具合でか、まるで顔が皺しわだらけで、三十をこしていそうに思えるくらいに老ふけて見えた。私はおとついの窓の女も、ゆうべ廊下で出会った少女なのか年よりなのかわからない女も、ひよつとしたらこの女だったのかも知れないぞと思つた。おまけに今朝は寝間着らしいものの上にはけばけばしい緑色のガウンをだらしなく引っかけたまま、トオストを齧かじりながら、栗色くりいろの髪の若い女が何やらもの静かに話しかける度たびごと毎たびごとに、荒あらしくそちらへ体をねじ曲げては無雑作に答えるかと思うと、そのついでに私の方をも無遠慮に見つめたりした。私

はなんだかいやな気がして、その女から眼をそらしながら、ふとその眼を私がときどきふんづける小さな軟かなものの方へ持つて行くと、それが三鞭酒シャンパンの栓せんらしいことを認めた。ははあ、ゆうべは此処でも三鞭酒を抜いたんだな？……こいつらが騒いだのかしら？ それにしてもこいつらは一体何者だろう、私にはとんと得体が知れない。……と、そんなことを考えながら、私が靴でその小さな栓を踏みにじっていると、食堂のドアを開けてあのつそりと、まだこのホテルで私の見かけたことのない、何処やらちよつとクライブ・ブルツクめいた中年の紳士が、寝ぼけたような顔をして、這入はいつて来た。そうしてなんだか寒そうに手を揉もみながら、女たちに何か私にはわからない冗談を言っているらしかったが、

そこへ丁度、ボオイが、私のためにポリツジを運んできたので、そいつをつかまえて、「朝飯出来ますか？」とぎごちない英語で聞いていた。支那人のボオイはますます**仏頂面**ぶつちようづらをしだして、その男のために中央の円卓子の上を不機嫌ふきげんそうに片づけ始めた。それを見ると私はなんだか急に微笑がしたくなった。そうして私のテエブルに砂糖がないことに気がついて、それをボオイに言うと思っていた私は、ついその男の方に気をとられて、それを言いそびれていた。……そのうちにどうしてだか突然、私には、この食堂の隅々すみずみにまで漂っていきそうな、陰惨というほどのものではないけれど、何かしら重苦しい、**澱んだ**よど空氣が呼吸いきぐる苦しく覚えられだした。そしてそれをあたかも具体化したように、私の咽喉

はへんにえがらつぽくなり出した。どうもすこし扁桃腺へんとうせんをやられたらしい。そうして砂糖なしのポリッジは大へん不味まずかった。

私はこのホテル・エソワイアンには、四日ばかり泊った。三日目ごろからますますこのホテルの中の噎むせぶような重い空気が私には我慢しきれなくなった。何ということなしに世間の空気が息苦しくなったあまりに、その息ぬきにわざとこんな世間から離れたようなホテルを選んで泊ったのであるけれど、このホテルの中のそういう空気は私を一そう窒息させそうにした。私はもつと新鮮な、そして気持のいい空気がほしくなった。私はとうとう須磨すまの方へ宿を替えることにした。

そうして私がこのホテルを立ち去ろうとする前に、最後に私の経験したいかにもこのホテルらしいビザアル異様なことは、一泊三円という約束だった宿泊料が四晩泊って十一円であつたこと、それは何も特別に一円負けてくれたのではなしに、あの頭のすこしは禿げかかつたお人好しらしい主人が熱心に首をかしげて暗算した合計であつたので、私は例の気まぐれから大いに愉快になり、すましてその通りに勘定を支払い、そしてそれだけ余分に私にはかなり無愛想だった支那人のボオイにチップを置いて来てやったことだった。どうも気まぐれというものは多少メフィステイクなものであるらしい。

その一週間ばかりの小さな旅行の後、私はすっかり扁桃腺をこじらせて、八度近い熱を出しながら、東京へ帰って来た。——そうしてそれなり寝ついてしまった私は、或る日、ふと手許てもとにあつたレクラム版のハイネの詩集をめぐっているうち、ホテル・エソワイアンに泊つた最初の晩、なかば眠りに浸っていた眼をいたずらにその文字面にさまよわせていたところの「五月に」という詩をひよつくり読みあてたので、今度は一字一字、小さな独和辞書を引っぱりながら読んでみたら、そのときは半分以上も字の意味が分らないままに自分勝手にそれをハイネ好みの甘美な詩に仕上げてしまっていた奴やつが実はハイネの晩年の、彼の愛していた友人たちからひどい仕打ちをされ、心臓の破れるような思いをしてい

た頃の、ひどく絶望的な詩であることを知って、私は愕然がくぜんとした。その詩の最後のいちれん一聯のごときは、

しかしここでは太陽と薔薇ばらとが

なんと残酷に私を突き刺すことよ！

そうして五月の青い空は私を嘲あざけっている。

おお美しい世界よ、お前は本当に厭いとわしい！

というような意味でさえあるのだ。つまり、私の忘れていた独乙語のほとんどすべてが呪詛じゆその文字だったのである。そして私がそれらの不可解な文字の上にながいこと眼をさまよわせているうちに、それが解らないなりにそのとき私の気持からはあまりに懸かけ離はなれているもののように私に思いなされたところのその詩は、

実はそのときの私自身の気持ちながらであったのだ。



# 青空文庫情報

底本：「燃ゆる頬・聖家族」新潮文庫、新潮社

1947（昭和22）年11月30日発行

1970（昭和45）年3月30日26刷改版

1987（昭和62）年10月20日51刷

初出：「新潮」

1933（昭和8）年9月号

初収単行本：「物語の女」山本書店

1934（昭和9）年9月1日

※初出情報は、「堀辰雄全集第1巻」筑摩書房、1977（昭和52）

年5月28日、解題による。

入力：kompass

校正：染川隆俊

2004年1月21日作成

2010年11月2日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 旅の絵

堀辰雄

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>